

司式:西窪 幸子  
奏楽:橋本恵美子

前奏:「奏楽曲」(J.S. バッハ)

招詞: 城門よ、頭を上げよ、とこしえの門よ、身を起こせ。栄光に輝く王が来られる。栄光に輝く王とは誰か。万軍の主、主こそ栄光に輝く王。(詩 24:9-10)

讚美歌:14「たたえよ、王なるわれらの神を」

交読詩編 72. 1-7

01 【ソロモンの詩。】神よ、あなたによる裁きを、王に/あなたによる恵みの御業を、王の子にお授けください。

02 王が正しくあなたの民の訴えを取り上げ/あなたの貧しい人々を裁きますように。

03 山々が民に平和をもたらし/丘が恵みをもたらしますように。

04 王が民を、この貧しい人々を治め/乏しい人の子らを救い/虐げ者を砕きますように。

05 王が太陽と共に永らえ/月のある限り、代々に永らえますように。

06 王が牧場に降る雨となり/地を潤す豊かな雨となりますように。

07 生涯、神に従う者として栄え/月の失われるときまでも/豊かな平和に恵まれますように。

朗読聖書①イザヤ書 49. 7-13

◆主の僕の使命(後半)

07 イスラエルを贖う聖なる神、主は/人に侮られ、国々に忌むべき者とされ/支配者らの僕とされた者に向かって、言われる。王たちは見て立ち上がり、君侯はひれ伏す。真実にいますイスラエルの聖なる神、主が/あなたを選ばれたのを見て。

08 主はこう言われる。わたしは恵みの時にあなたに答え/救いの日にあなたを助けた。わたしはあなたを形づくり、あなたを立てて/民の契約とし、国を再興して/荒廃した嗣業の地を継がせる。

09 捕らわれ人には、出でよと/闇に住む者には身を現せ、と命じる。

◆シオンの回復(前半)

09 彼らは家畜を飼いつつ道を行き/荒地地はすべて牧草地となる。

10 彼らは飢えることなく、渇くこともない。太陽も熱風も彼らを打つことはない。憐れみ深い方が彼らを導き/湧き出る水のほとりに彼らを伴って行かれる。

11 わたしはすべての山に道をひらき/広い道を高く通す。

12 見よ、遠くから来る/見よ、人々が北から、西から/また、シニムの地から来る。

13 天よ、喜び歌え、地よ、喜び躍れ。山々よ、歓声をあげよ。主は御自分の民を慰め/その貧しい人々を憐れんでくださった。

朗読聖書②マタイによる福音書 2. 1-12

◆占星術の学者たちが訪れる

01 イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、

02 言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」

03 これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。

04 王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。

05 彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

06 『ユダの地、ベツレヘムよ、/お前はユダの指導者たちの中で/決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、/わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』

07 そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。

08 そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。

09 彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。

10 学者たちはその星を見て喜びにあふれた。

11 家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

12 ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

## 祈祷

創造主であり、歴史を司っておられるイエス・キリストの父なる神さま、2025年最後の主の日の礼拝に、私たち一人ひとりの名を呼んで、教会へと、またライブ配信へと集めてくださいました恵みに感謝致します。

過ぎた1週間、私たちはあなたの御子、主イエス・キリストのご降誕をお祝いする時を持ちました。“主が闇の中に永遠の光として来てくださった”という喜びの出来事を多くの方と分かち合いましたことに、心から感謝致します。しかし、私たちは、家畜小屋でお生まれになったイエスさまの謙虚さと大きな喜びを日々の生活の中で表現し切れなかったと問われれば、あなたの御前に、“お赦しください”と言うしかない者です。あなたが私たちを赦し、今日、礼拝に招き、新しい命に生きる道を用意してくださったことに感謝致します。

私たちは今日も世界の平和、日本の平和のために祈ります。あなたの正義がこの地上でも行われますように。あなたの平和が一日でも早く実現しますように、と切に願いをお祈り致します。そのために、私たちができることを示し、実行できるように私たちを励ましてください。

今日の御言葉を取り次ぐために、あなたが大谷昌恵牧師をお与えくださいましたことを感謝致します。病を持ちつつ御言葉に仕える大谷昌恵牧師を通して、あなたは、“力は、弱さの中でこそ充分に発揮されるのだ(IIコリ 12:9)”との聖書の御言葉を私たちに示してくださいました。感謝致します。どうか語る大谷昌恵牧師を、今日も聖霊によって支えてください。そして聞く私たちの心を柔らかくして、あなたの御言葉を染み渡らせてください。

様々な事情で今日の礼拝に与ることができない兄弟姉妹のことを思っています。そのお一人おひとりに、あなたが必要な助けを送ってくださいと信じています。また、教会から離れている方々のために祈ります。あなたは決して手を離さない方だと知っています。人間の思いを遥かに超えた主の導きを信じて、その方々を覚え、その方々が戻って来られる教会として歩み続けられるように私たちを導いてください。そして、求道中の方々のために祈ります。主が相応しい時を用意して、その時まで、共に歩んでくださるよう心からお祈り致します。

主よ、今朝、日本で、そして世界で献げられます礼拝が、賛美と感謝に満ちたものでありますように祈ります。主なるあなたとの豊かな交わりの時となりますよう祈ります。

悪人にも善人にも太陽を登らせ、正しい者にも正しくないものにも雨を降らせてくださる主よ。私たちの現実がどうであれ、それを超えて働かれる主に信頼し、恐れず喜んで日々を送れるように私たちを強め導いてください。

これらの祈りを主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

## 讃美歌：278「暗き闇に星光り」

### 説教 「星に導かれて」

大谷昌恵

キリスト教徒は総人口の1%未満という日本ですが、クリスマスの賑わいは、年を追うごとに増しているようです。煌びやかなイルミネーション、浮き立つような音楽、まるで“クリスマスは楽しまなければ損ですよ”と言わんばかりです。しかし、クリスマスは楽しむだけのものではありません。喜びの時なのです。クリスマスの楽しみは喜びの上にもこそあるのです。そして、華やかさの中ではなく、闇の中にこそ神の眼差しが向けられているのだということ、私たちはクリスマスにあたって再確認したいと思います。

街中の溢れるような光がクリスマスの全てではなく、また、その中にいる人だけがこの世に生きる人ではありません。本当の意味で、闇の中に輝く光は何なのか。そして、その光を本当に心待ちにしている人は、実は溢れ出る賑やかさの外にいる人なのではないか、ということに思いを馳せたいと思います。

「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにいますか。(2節)」 そう言ってヘロデの下へやってきた占星術の学者たちも、楽しみのためではなく、新しい王が与えられた喜びに与るために長い困難な旅をして来ました。しかし、彼らも最初は人間的な思いで新しい王に会いにやってきたのです。ユダヤ人の王、それはあくまでも人間の世の事です。“王なのだから都に居るだろう。それも煌びやかで人が溢れる宮殿にいることだろう。” そう思った学者たちは、都エルサレムのヘロデ王のもとを訪ねました。学者たちは東の方で「星」を見てやって来たのですが、この時、星は学者たちを導いてはいません。なぜ、イエスの生まれたことを告げる星は、まず、異邦人である東方の学者たちに示されたのでしょうか。そして、なぜ一気にイエスのもとへと彼らを導かなかったのでしょうか。

学者たちは星の出現により、御子の誕生の「時」を知ることはできました。しかし場所までは分かりませんでした。逆に、エルサレムの人々は旧約聖書の預言者によって救い主誕生の「場所」がベツレヘムであることを知っていました。時を知っている異邦人と場所を知っているユダヤ人、両者が出会うことによって神の救いがユダヤ人だけのものでも、異邦人だけのものでもなく、すべての人間に与えられたものであることが、まさにその救い主誕生の瞬間に示されているのです。人間の世での王を拝むために来た占星術の学者たちですが、彼らの話を聞いたヘロデ王は、民の祭司長たちや律法学者たちに、「メシア(キリスト Χριστός)はどこに生まれることになっているのか(4節)」と尋ねます。東から来た学者たちは、ただ「ユダヤ人の王」と言っているのに、ヘロデは、その新しい王が「メシア(救い主)」だと言うのです。ヘロデ王にとって新しいユダヤ人の王とは自分を蹴落とすライバルです。そのライバルは単に人間的な力を持ったものではなく、神から遣わされた救い主であることにヘロデは気がついていました。そのヘロデの下から出かける学者たちを、今度は星が先立って進み、幼子イエスの所へと確かに彼らを導きます。そこには光の煌めきも輝かしさもなく、多くの人が「傳かたづける」のもなく、母マリアが共に居るだけでした。この時、学者たちは「真の光である救い主が闇の中に与えられている」ことをはっきりと心に刻んだに違いありません。“明るさや賑わいの中に居る王は決して神によって遣わされた王ではなく、そこに救い主はいない、闇の中にこそ救い主はおられる”と学者たちは知ったのです。

ドイツ告白教会の牧師であったディートリヒ・ボンハッフアー、彼もまた、“闇の中にこそクリスマスの喜びがある”ということをよく知っている人物でした。ボンハッフアーは、ナチス政権を鋭く批判し、ヒトラーに対する地下抵抗運動に加わります。彼の身を案じる神学者らによって亡命の準備が整えられていたアメリカに一時滞在しますが、わずか1ヵ月後にはドイツに帰国することを決断します。1943年、ユダヤ人の亡命を援助したとして逮捕、その後、ヒトラー暗殺計画に加わっていた事が発覚し、1945年4月8日に処刑されました。ヒトラーの自殺によってナチス体制が崩壊したのは、ボンハッフアーの死からわずか3週間後のことでした。

8人兄弟の6番目として生まれたボンハッフアーには、双子の妹ザビーネがいましたが、彼女は後に、『ボンハッフアー家のクリスマス』という本を出版しています。ここには幼い頃のボンハッフアー家のクリスマスの様子、そして戦争が始まり、ディートリヒはじめ、親族がナチスに逮捕されている中でのクリスマスが記されています。裕福な家庭だったボンハッフアー家は、アドヴェントに入ると一家をあげてクリスマスの準備に取り掛かります。そしてクリスマス・イブには家族だけではなく、使用人たちも皆集まって、ボンハッフアーの母親による聖書の朗読を聞き、賛美歌を歌います。その後、そこに居る全ての人たちにプレゼントが配られ、クリスマスの喜びを分かち合います。静かで穏やかな、そして御子のご降誕を皆で心から喜ぶクリスマスを祝っていたボンハッフアー家ですが、1933年ヒトラーが政権をとってからは何年にもわたって家族の祝うクリスマスから喜びが消えます。1943年、44年とボンハッフアー家に関わる人たちの逮捕が相次ぎ、悲しみと恐れに満ちたクリスマスとなりますが、その中であって、獄中からのディートリヒ・ボンハッフアーの手紙は一筋の光となります。1943年12月17日、9ヶ月におよぶ独房監禁中の待降節最後の週に、ディートリヒは両親に宛てて、次のような手紙を書いています。

キリスト教徒の立場からすれば、刑務所でのクリスマスはさして問題となるものではありません。ここでは、むしろ、クリスマスという名のみで祝われる多くの場合より遥かに意味深い、より本質的なクリスマスが祝われていると言えます。悲惨、苦しみ、貧困、孤独、失望、そして罪が神の目には、人間の審きとは全く別の意味を持つこと。また、人が目を背けようとする、まさにその場所に、神は目を向け給うこと。そしてキリストが宿を断られたがために馬小屋にお生まれになったこと。これらのことを、囚人たちは他の人より深く理解するのです。そしてそれこそがまさに、彼らにとっての喜ばしい福音であり、また、それを信ずることにより、全ての時空の壁を破る全キリスト教徒の共同体の一員に組み込まれるのを知ること。こうして獄舎の壁はその意味を失うのです。

クリスマスの本当の意味は何か。それは決して自分たちの楽しみのためにあるのではなく、深い闇に目を向けられた神の究極の愛を再確認する時なのだ。ボンハッフアーは語ります。普通なら長い獄中での生活、希望の見えない状況に、人はクリスマスを祝う気力さえ失ってしまうでしょう。そこで迎えるクリスマスに孤独感を深めることでしょう。しかしボンハッフアーは、その“孤独の中だからこそ育てられていく感覚があるのだ”と言います。何が彼をそのように前向きな思いに導いたのか。それは幼いころ経験したクリスマスの喜びだったのではないのでしょうか。なぜ神が御子をこの世にお送りくださったのか。そのことがどれほど大きな喜びであり感謝に満ちたことなのか。福音書の降誕記事を繰り返し聞き、真のクリスマスの意味を知っていたからこそ、ボンハッフアーは絶望的な状況の中でも前向きに生きることができました。そして暗闇の中にも神によって、真の光が与え

られた事を知っていたからこそ、そこに希望を見出すことができたのです。

以前、担任教師を務めていた教会の祈祷会で、『ヨハネによる福音書』を読み進めていた時のこと。アドヴェントに入った頃、丁度、イエスの受難について読むことになりました。1章から順に読み進めてきましたので何の作もないのですが、“クリスマスを迎える時に受難とは、なんとまあ不似合いなことか”と私は思いました。しかし、実際に深く読んでいくうちに、それがどんなにか薄っぺらなクリスマス理解であるかに気づき、恥ずかしい思いを致しました。御子のご降誕は単に喜びで終わるものではありません。その誕生は、この世に遣わされたときから、既に死というものを約束されていた、謂わば、死に向かうための誕生でした。しかも、その死は私たち人間を罪から救うため、ご自身は全く罪がないのに、ただ、神の愛による救いを全うするために、十字架に架かることを約束された誕生だったのです。

星に導かれてイエスの下に辿り着いた占星術の学者たちは、「ひれ伏して幼子を拝み、宝の箱」から贈り物を出して献げます。「黄金」はイエスの王としての権力を表し、「乳香」はイエスが神であることを表します。そして「没薬」はイエスの受難、死を表すものです。先ほどお話したヨハネ福音書の受難記事には、まさにこの「没薬」が出てきます(ヨハ19:39)。かつて夜の闇に紛れてイエスに教を請うできたニコデモが、イエスの葬りのために没薬と「沈香」を混ぜたものを持ってきます。それを粉末状にし、遺体を巻く亜麻布に振りかけます。つまり、遙々イエスを訪ねて東からやってきた学者たちは、生まれたその喜びの時に死の備えを贈り物としているのです。御子の誕生は、まさに喜びであります。それは単に祝うだけのものではなく、“受難と復活をも見据えた大きな神の愛を喜ぶもの”です。それはまた、神のご計画によるものであり、それを指し示すのは、神が示された星の導きによるものと言えるでしょう。

この後、皆さんと一緒に歌う賛美歌 469 番「善き力にわれ囲まれ」の歌詞は、ディートリッヒ・ボンヘッファーの詩によるものです。ボンヘッファーにとって最後のクリスマスとなった 1944 年 12 月 28 日、彼はベルリンのゲシュタポ監獄の鉄格子付地下牢で、婚約者マリアソン・デーデマイヤーにこの詩を書き送りました。長い獄中生活、疲れと不安や恐れが絶えずボンヘッファーを襲っていたことでしょう。しかし、彼は、決して絶望のみに支配されていたのではなく、本当の神の御力がどこに働くかを知り、その絶望的とも言える状況の中にある時にこそ、神の働きを身近に感じることができることを、この詩の中でも語っています。この賛美歌の 3 節には、「たとえ主から/差し出される杯は苦くても、」という歌詞があります。これはイエスがご自身の十字架上の死の前に、ゲッセマネで祈った時のことを思い出させます。実際、ボンヘッファーはそのイエスを念頭において、この部分を書いています。ゲッセマネの祈りについて、ボンヘッファーは 1939 年から 40 年にかけて、一つの解釈を示しています。それは、“神が人に飲み干すようにと盃を差し出す時、神は強い信仰のもとに、その人の心を前もって整えられるだろう”というものです。“神が相応しい備えをしてください。だから、何も案ずることなく飲み干せばいい。”こう考えるボンヘッファーだから、彼自身、杯が差し出されることに不安や躊躇なく安らかでいられるのです。また、1944 年 7 月 21 日付の手紙には以下のように書いています。

もし人が自分をもとにして何かを生み出そうとするのを完全に断念する時、人は神の腕の中に身を投げ入れる。すると人はもはや、自分自身の苦悩ではなく、神のこの世における苦悩を真剣に受け取るだろう。ゲッセマネのキリストと共に、目を覚ましてい

ることだろう。そして私は、これが信仰なのだ、回心なのだと思うのです。このようにして、人は人間に、キリスト者になります。この世の生活の中で神の苦悩と共に苦悩するならば、どうして成功に酔ったり、失敗に混乱したりするだろう。このことを認識できたことを私は感謝しています。しかも私は自分がかつて歩いてきた道の上でこそ、このことが認識できたのだと自覚している。だから私は感謝を込め平安のうちに過去のこと現在のことに思いをいたすのです。

“神の苦悩を真剣に受け取ること、これこそが信仰なのだ”とボンヘッファーは語ります。この強い信仰こそが、ボンヘッファーを、ただ絶望に打ちひしがれるのではなく、闇の中にこそ存在する神の愛へと向けるのです。

ボンヘッファーのような強い信仰、私も持ちたいと思います。どんなに辛い状況にも耐え得る信仰、神への信頼があったら、と思います。しかし、実際には難しい。不安と絶望の中で右往左往し、神の存在すら疑ってしまうのが私たち人間なのだと思います。では、そんな弱者にできることは何もないのでしょうか。いいえ、あります。

暗闇にこそ、神からの光が注がれていることに思いを致すこと。そして、その神の愛に希望を置いて生きて行くこと。神の力を信じること。クリスマスに与えられた真の光の輝きを心に刻み、神から与えられた星に導かれて、新しい年も歩んでいきたいと願います。共に祈りを合わせましょう。

神さま、一年最後の主の日、あなたからの御言葉によって力を与えられ、新しい年に向けて歩み出すことができる幸を感謝致します。年が改まったからといって、そこには希望だけが満ちているわけではありません。痛みも悲しみもあることでしょう。しかし、いついかなる時も、あなたが私たちに先立って歩んでくださることを信じ、そのことに望みおいて進んでいきたいと願います。

この感謝の願いの祈り、われらの救い主、イエス・キリストの聖名を通して御前にお届け致します。アーメン。

#### 讃美歌:469「善き力にわれかこまれ」

#### 献金・感謝(藤田幸子)・主の祈り(讃美歌 21 93-5A)

父なる神さま。主にある兄弟姉妹と共に礼拝を献げることが許されましたことを感謝致します。説教を通して豊かに御言葉を与えてくださり感謝致します。私たちがこの 1 週間を、夫々の旅路の中で、御言葉を糧として歩むことができますようにお導きください。

私たちは必要な物を与えられ、主の僕として生きることが許されていることを感謝致します。今、夫々が与えられた物の中から感謝と献身のしるしを御前に献げます。どうぞ祝して教会のご用のために用いてください。

主が教えて下さった「主の祈り」を共に唱和し、新しい日々を迎えさせてください。「主の祈り」…アーメン。

#### 派遣:讃美歌 90「主よ、来たり、祝したまえ」

祝福:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の豊かな交わりが、私たちの上に、いつまでもありますように。アーメン。

報告:①100 周年出版物頒布の案内、②週報記載ワンドロップ献金の案内、③東日本大震災被災地支援チャリティーコンサート来年 3/14 開催の案内

後奏:「いと高きところにいます神にのみ栄光あれ」(J. P. スウェーリンク)